

(続紙 1)

京都大学	博士（地域研究）	氏名	園中曜子
論文題目	トルコ共和国におけるヴィジュアル公共圏の成立と展開 ー複合社会をつなぐ承認と共感のコミュニケーションー		
(論文内容の要旨)			
本論文は、トルコにおける政治文化の変容を、ヴィジュアル・ポリティクスの観点から論じる。そして、人びとがヴィジュアル・イメージを用いて共通の関心事に関わる問いや主張を開かれたかたちで呈示し、文化政治的なコミュニケーションを行う場であるヴィジュアル公共圏が、2008年前後にトルコにおいて成立したと主張する。本論文は、このヴィジュアル公共圏の成立と展開の過程を追うことで、ヴィジュアル・イメージを用いたコミュニケーションが、トルコの民主主義および公共圏のありかたにどのような影響を与えたかについて考察する。 第1章は、本論文の問いと視角を示す。現代トルコにおいては、ゲズィ公園でのデモが示すように、多様な人びとが政治参加を為すに至っているが、そこにおけるコミュニケーションはいかに可能になっているのか。本論文はその基盤はヴィジュアル・イメージを用いた共通感覚にあると主張する。ヴィジュアル公共圏という視角は、共通の場を有する人びとが、出自やイデオロギーの相違を超えて、言語的論理のみに依存することなくコミュニケーションを行っている、現代の多元的で民衆的な公共圏の実態を明らかにするものである。 第2章は、トルコ共和国の国民概念の成立過程を考察している。そこでは、諸民族・諸宗教に属する人びとの統合の試みと挫折の上に、共和国の国民概念の基礎が成立していく過程を示している。 第3章は、1970年代末までのヴィジュアル・ポリティクスの歴史を考察している。そこでは、世俗主義に基づく政権がイスラームの要素を公共空間から締め出す一方、西洋やアナトリアの文化を連想させるヴィジュアル・イメージを制作したのに対して、民衆の側では日常の喜怒哀楽を表現したヴィジュアル・イメージが人気を博し、人びとがトルコ社会における共通感覚を形成していった過程を示している。 第4章と第5章は、1980年から2013年5月のあいだのヴィジュアル・ポリティクスの歴史を考察している。第4章は、1980年代と1990年代において、世俗主義政党とイスラーム主義政党の政党政治的な対立に基づいた、ヴィジュアル・イメージによる政治的交渉が多数行われたことを示している。第5章は、2000年代において、テロやマイノリティへの暴力事件、政権の強権化などが表出する中で、2008年前後に国の一体性喪失の恐れと平和的共生の願望のあいだのジレンマが高まり、そのジレ			

ンマの中からヴィジュアル公共圏が成立した過程を示している。それは、政治的な対立の言語を超えて、誰もが安心して生活できる社会を実現すべきだという共通感覚を、ヴィジュアル・イメージを通じて公共的に構築する動きであった。

第6章は、2013年5月のゲズィ公園デモを契機として、ヴィジュアル公共圏が発展を遂げた過程を考察している。そこでのヴィジュアル・イメージの使用は当初、市民団体が反対勢力の批判を避けつつ主張を行うための媒体であったが、やがて「普通の市民」がコミュニケーションを行う手段としての役割を担うものとなっていった。

結論では、ヴィジュアル公共圏がトルコの民主政治および公共圏のありかたに与えた影響について考察している。ヴィジュアル公共圏は、ヴィジュアル・イメージの持つ情動喚起性と多義性から、自身が属する集団のイデオロギーや利害に基づかず、共通感覚に基づいて平等な立場から物事を判断し、承認と共感によってコミュニケーションを行うことが可能となる場である。そこで呈示される問いは誰でもが安心して暮らせる社会という生活に関わるものであるために、高度な政治知識がなくてもそのトピックに関心のある者すべてがコミュニケーションに参加することが可能になる。

本論文は、現在のトルコの民主政治において、人びとが意見の複数性を保ちつつコミュニケーションを行うことのできるヴィジュアル公共圏が大きな影響力を持つようになってきていることを指摘している。そして、ヴィジュアル公共圏と議会政治の場を協働させていくことが、トルコの民主主義を健全に機能させていく上で重要な課題であると結論づけている。

(論文審査の結果の要旨)

従来の現代トルコ政治の分析にあたっては、イスラーム主義と世俗主義のあいだのイデオロギー対立を政治構造の前提としていた。しかしそうした観点からのみでは、たとえば近年のゲズイ公園におけるデモにおいて、生活環境や安心・安全またマイノリティの権利などの、イデオロギーに還元できない多様な 이슈が政治的焦点となったこと、そして少数民族や宗派的マイノリティまた性的マイノリティが公共的なプレゼンスを増していること、を十分には説明できない。また近年の社会運動・政治運動においてヴィジュアル・イメージの使用はきわめて顕著となっている。

本論文は、こうした状況を踏まえた上で、現代トルコの政治および社会運動におけるヴィジュアル・イメージをとりあげ、イデオロギーや利権などの従来の政治概念では表現できない 이슈がそこで表現されていることに着目した。そして、長期のフィールドワークおよび文献史料に基づいて、ヴィジュアル・ポリティクスという観点から、共和国成立後のトルコ政治史を再検討することを試みている。

本論文の意義としては以下の四点が挙げられる。

第一に、独立後トルコにおいて公共的に用いられたヴィジュアル・イメージを、建築、ポスター、ステッカー、その他印刷物を軸として丹念に収集し、このテーマの研究にとって基礎となるデータを提供したことである。

第二に、そうしたヴィジュアル・イメージが政治と社会において有した意味を、同時代の政治状況と社会経済構造という歴史的・現代的文脈に即して分析して見せたことである。これにより、これまでのトルコ政治研究において焦点となっていたイデオロギーや政策そして利害対立に加えて、ヴィジュアル・ポリティクスという新たな視角を導入し、トルコ政治文化の理解をさらに豊饒化する端緒を開いた。ヴィジュアル・イメージは、イデオロギーや利害に基づいた政治的主張を効果的に為す手段として用いられただけでなく、民衆におけるポピュラー・カルチャーにおいて、政治に対する不満や、現状についてのそこはかとな不安といった共通感覚を醸成し、公共的に共有するための媒体としての役割を果たしたのであった。

第三に、現代トルコにおける多元的公共圏の発達を「ヴィジュアル公共圏」という視点から分析したことによって、政党政治と民衆からの抵抗という視点に収まらない、多元的な民衆のあいだの公共的かつ非言語的なコミュニケーションについて論じることを可能にしたことである。本論文は、2008年頃より、政府によ

る抑圧を避けつつ誰にでも理解可能なかたちで自身の主張を伝えるために、ヴィジュアル・イメージを用いた公共的なパフォーマンスが盛んに行われるようになっていったと指摘している。この「ヴィジュアル公共圏」の成立は、民衆のあいだにヴィジュアル・イメージを介して蓄積された共通感覚が、ポピュラー・カルチャーの場を超え、公共的な場で重要な政治的・社会的な意味合いを持ってくるようになってきたことを意味している。これによって、多様な民衆のあいだで、イデオロギーや利害を超える共通感覚に基づいた、承認と共感によってコミュニケーションを行う可能性が開けたという指摘は、きわめて興味深い。

以上のように本論文は、ヴィジュアル・イメージに着目することを通じて、現代トルコ政治文化についての新たな理解をもたらした、きわめて斬新で優れた研究である。ヴィジュアル公共圏という枠組の有効性については、さらなる実証を積むことが望まれるが、この提起は、本研究が新たな研究領域を中東地域研究および政治文化研究において開きうる可能性を示しており、学術的な貢献は大きい。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成27年1月23日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。